

今日の聖書箇所メッセージを一言で言えば、「生ける神に立ち帰るように」ということです。パウロはそのことをここで語っている。

事情はこうでした。パウロ、バルナバの一行はイコニオンの町からリストラの町にやってきました。そこに足の不自由な一人の男の人がいて、パウロの語る福音に聞き入った。パウロはこの人を見て、彼の信仰を受けとめ、「自分の足でまっすぐに立ちなさい」と呼びかけたのです。

すると男は立ち上がり、歩き出したのです。いやしの奇跡が起こったのです。

町の人々はこの奇跡を目の当たりにして驚く。そしてあるうことが「神々が人間の姿をとっておくだりになったのだ」と言い出して、バルナバとパウロを神として祭り上げようとしたのです。挙句二人の前にいけにえをささげようとし始めた。バルナバとパウロは群衆の中に飛び込んでいき、大声で叫び、こんなことはやめなさい、わたしたちもあなたたちと同じ人間だ、と言い「あなた方が、このような偶像を離れて、生ける神に立ち帰るように」と呼びかけたのでした。そしてパウロは、神を語る。そして自分たちにいけにえを奉げるのをやめさせる。パウロのここでのメッセージの中心は、「生ける神に立ち帰りなさい」でした。

足の不自由な人が福音に聞いて、パウロの呼びかけに応じて立ち上がり歩き出した。それは人々から見て、確かに驚きだったでしょう。しかし、人々は彼がイエス・キリストの福音に聞いた驚きは受けとめていなかった。

ユダヤ人であれ、ギリシア人であれ。誰であれ、イエス・キリストの十字架によって担われているのだ、どんな罪人もゆるされ、神の愛と新しいいのちの中にあるのだ、という福音を彼は聞いたのです。足が不自由ということで、彼がどれほどの苦しみや、孤立、重荷を負わされてきた、わたしたちは想像するしかないのですが、その中で彼は支えられている自分を見出し始めた。「立ち上がりなさい」と呼びかけられて、それに応えようとする彼は、すでに福音の中で生かされているのです。

ところで一方、町の人々は、奇跡そのものに目奪われ、二人を神だと思いはじめた。図抜けた力や、超人的なものを感じたら神だとしてあがめる。さまざまなものを神とする神々の文化がリストラの人々の中にあっただけでしょう。今の日本社会にもすぐ神という言葉を使う文化がありますが、案外その根は深いのかもしれません。

神と人間の境界があいまいなのでしょう。

しかしパウロは、それに対してはっきりと言う。「あなた方がそのような偶像を離れて、生ける神に立ち帰るように、わたしは福音を告げ知らせているのです。」

偶像と訳されている言葉のもとの意味は「空しい」ということで、空っぽということ。中身がない。偶像というのは、もともと石や木から人間の手で作ったものです。それを神として拝んだり、神の象徴として扱う。しかし、人は石や木ばかりではなく、次々と偶像を作っていく。バルナバやパウロまで神にしてしまう。

なぜ人は偶像を作るのか。作りたいのか。自分の思い描く神がほしいからかもしれない。一人一人、みんなその時々自分の思い描く、自分にとって都合のいい神がほしい。足の不自由な人が歩きだせば、そういう神がほしい。自分をうまくいかせる、成功させたり、自分が願うことが叶える神がほしいのです。偶像はわたしの心や頭で作ろうとする神の反映とも言える。

パウロはそれに対して、偶像を離れて、生ける神に立ち帰るように、福音を告げ知らせているのだ、と言う。言い方を変えれば、生ける神に立ち帰るには、福音に聞くことがなければならない、福音に聞く以外にはないと言っているのです。我々の中には、さまざまな形の偶像がしぶとく住み着いているし、沸々と湧き起ってくる。その偶像から離れることは、自分の力ではできない。生ける神、すなわち、生きて今働きかけ、今語りかけ、今呼びかける神のみ声に聞く以外にはない。

最近、不思議な音楽を聴きました。ギャビン・ブライアーズ。この人は大学で哲学をまなび、音楽の才能にも恵まれジャズのベース奏者として活躍。やがて現代音楽の作曲家としても知られるようになる人です。

彼は友人と、あるドキュメンタリーフィルムを作ろうとして、映像を撮っていました。するとフィルムに偶然、町の酔っ払いの歌が入っていたりした。その中に、あるホームレスの老人の歌う歌が入っていた。それは讚美歌の一節で、老人が自分で即興でメロディーをつけて歌っていた。彼はその讚美歌の短い一節をくりかえしくりかえし歌っていた。だがその映像は没になり、日の目を見ることはなかった。

ところがその後、ブライアーズが家でピアノを弾いていたら、ホームレスの老人が歌っていた歌の一節が頭の中で鳴り出して止まらない。ブライアーズがピアノに載せてみると、うまく演奏に合う。やがて彼はそれをオーケストラ用に作曲し、なんとホームレスの老人の偶然撮ったその歌の録音をループさせて、くりかえしくりかえし再生して、一つの長い曲を作り上げるのです。

ブライアーズの曲「イエスの血は決してわたしを見捨てたことはない」はその後レコードで世に出、やがてさらに長い曲やさまざまなバージョンになって、発売される。しかし変わらず、歌を歌っているのは、ホームレスの老人。それも一度きりのたまたま撮影で取られた中で録音

された彼の歌。美しい声とか、きれいな声とは言えない。だが、老人は短い歌詞をくりかえし歌っている。そしてその声に引き込まれていく。

その讃美歌の一節とは、こういう歌詞。

イエスの血は決して私を見捨てたことがない。／決して見捨てたことがない。

イエスの血は決して私を見捨てたことがない。／それは私が知っている一つのこと。／彼は私を愛してくださる。

老人の歌うこの歌詞を、短いバージョンで25分、長いものは1時間を優に超える曲でひたすらくりかえし歌うのです。わたしはそれを聞いていて、次第にこの歌詞が胸に染み入ってくることを経験したのです。それは作曲したブライアーズがそうであったように、忘れられない。

イエスの血は決してわたしを見捨てたことがない、というのは、キリストの十字架ということでしょう。イエス・キリストの十字架は決してわたしを見捨てない、見捨てたことはない。と彼は歌うのです。そして、それはわたしが知っている一つのこと。彼はわたしを愛してくださる。1時間以上、それをひたすらくりかえし聞くのです。

路上でこの讃美をくりかえし歌っていた老人。そしてこの讃美を忘れられず頭の中で鳴り出したブライアーズ。そしてそれをくりかえしくりかえし聞く人々。

イエスの血は決してわたしを見捨てたことがない。それはわたしが知っている一つのこと。彼はわたしを愛してくださる。

この歌は、呼びかけへの応答だ、と言った人がいます。なぜかという、イエス・キリストは、わたしたちのためにこの世に生まれ、わたしたちのためにこの世で語り、御業をなし、わたしたちのために苦しみを受け、死に、わたしたちのために復活された。その生涯のすべてがわたしたちに対する呼びかけなのです。ずっと呼びかけ続けておられる。その存在のすべてがわたしたちへの呼びかけなのです。

そのことにこの人は気づいたのではないか。キリストの呼びかけは今も続いている。今この時もわたしは呼びかけられている。だから、わたしもキリストに応える。応え続ける。生涯にわたって応え続ける。歌い続ける。

このことに気づいていたのではないか。老人も、作曲家も、この曲を聞いた人々も。イエスの血は決してわたしを見捨てたことがない。決して見捨てたことがない。それがわたしが知っている一つのこと。彼はわたしを愛してくださる。

パウロはもともと神を知っていたひとです。ファリサイ派の一員として、神のことを誰よりもよく知っているものだと思っていたかもしれな

い。だが彼は、ダマスコ途上で復活の主イエスに出会ってから、神はイエス・キリストにおいて、このわたしに語りかけ、呼びかけてくださっていることを知らされてきた。神はイエス・キリストにおいてわたしを愛してくださっていることを知った。その愛は、彼がそれまで知っていた愛とは違った。十字架の愛だった。そしてその十字架の愛には、呼びかけがあった。彼は愛されている自分を受けとめながら、その呼びかけに応える自分になりたいと願った。福音に仕えるものとなりなさい、との呼びかけを彼は聞き、その呼びかけに応える。

彼はその呼びかけに応えようとして生きるのです。呼びかけに応じて生きる。そこに生きている神との交わり、生きている神と共に生きる歩みが生まれていく。人はその時偶像から初めて解き放たれる。「偶像から離れ、生ける神に立ち帰りなさい。」一人一人、主のみ声に聞き、呼びかけに応じて歩いていきましょう。